

【 復活讃詞 第4調 】

しゅのおんなでしはふくかつのひかるおとづれをてんしよりきき
主女弟子は復活の光音天使よりきき
うけて、げんそよりのていざいをふるいすて、しとに
受て、原祖の定罪を振棄しとに
ほこりていえり、しはほろぼされ、ハリストスかみは
神ほこりていえり、死は滅ぼされ、ハリストスかみは
神
ふくかつして、せかいにおおいなるあわれみをたまえり。
復活かして、世界大あわれみをたまえり。
こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。
光榮は父子聖神歸、今も何時世世に、アミン。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

しととひとしくどうざなるものちゅうじつにしてしんちなる
使徒等と同座なるもの忠實神智
ハリストスのえきしゃ、せいなるしんにえらばれたるふえ、ハリストスの
愛にみちたるうつわ、わがくにのこうしようしゃ、
あしとしゅきょうせいニコライよ、なんちのぼくぐんのたため、
亜使徒主教聖爾羊群のたため、
およびぜんせかいのたために、いのちをたもうせいさんやにいのり
及全世界のたために、生命賜うせいさんやにいのり
たまえ。給

司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしよう} 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

Musical notation for the Holy Trinity Blessing (聖三祝文) with lyrics in Japanese. The text is arranged across four staves of music.

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、
 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生者、
 われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 我等を憐れめよ。聖なる神、聖なる勇毅、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなる
 聖なる常生者、我等を憐れめよ。聖
 かみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 神、聖なる勇毅、聖なる常生者、我等を

あわれめよ。こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 憐光榮父子聖神歸す今
 いつもよよに、アミン。せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 何時も世々に、アミン。聖なる常生いのものよ、我等を
 あわれめよ。せいなるか神み、せいなるゆうきぎ、せいなる
 憐聖なるか神み、聖なる勇毅、聖
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。
 常生いのものよ、我等を憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾の神に

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、みなちえをもつて
 主 爾 工業 何 大 皆 智慧 以
 つくれり。
 作

誦經) 我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅ よ 、 なんぢの しわざ は なんぞ おお き 、 み な ち え を も っ て
 主 爾 工業 何 大 き 皆 智慧 を 以
 つくれ り 。
 作

誦經) ^{しゅ なんぢ しわざ なん おお}主よ、爾の工業は何ぞ多き、

み な ち え を も っ て つくれ り 。
 皆 智慧 を 以 作

【 使徒經 (アポストロス) 203 端 ガラティヤ書 2 章 16 節~20 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しよ よみ}聖使徒パウエルがガラティヤ人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き}謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい ひと りっぽう おこない よ あら ただ しん よ ぎ}兄弟よ、人は律法の行に由るに非ず、唯イイス・ハリストスを信ずるに由りて義と
^{し われら しん しん よ りっぽう}せらるるを知りて、我等もハリストス・イイスを信ぜり、ハリストスを信ずるに由り、律法
^{おこない よ ぎ ため けだしりっぽう おこない よ ひとひとり ぎ}の行に由らずして、義とせられん爲なり、蓋律法の行に由りては、人一も義とせ
^{も われら よ ぎ もと みづから なおざいにん}らるるなし。若し我等ハリストスに由りて義とせられんことを求めて、自も猶罪人たらば、
^{あに つみ えきしゃ しか けだしも わ こぼ もの われまたこれ た}豈ハリストスは罪の役者たるか。非らず。蓋若し我が毀ちたる者、我復之を建てば、
^{すなわちおのれ ざいにん しめ われりっぽう よ りっぽう ため し かみ ため い}則己の罪人たるを示すなり。我律法に由りて律法の爲に死せり、神の爲に生кин
^{ため われ とも じゅうじか てい すで われい あら すなわち}爲なり。我ハリストスと共に十字架に釘せられたり。既に我生くるに非ず、即ハリス
^{われ うち い わ いまにくたい あ い われ あい わ ため おのれ す}トスは我の中に生くるなり。我が今肉体に在りて生くるは、我を愛して我が爲に己を捨て
^{かみ こ しん よ い}し神の子を信ずるに由りて生くるなり。

(比較用 口語訳)

兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。

キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている。しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリストを引き降ろすことである。また、「だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。では、なんとやっているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である。すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたことと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんべい せいちよく けんべい} 神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ ぎ あい ふほう にく} 爾は義を愛し、不法を惡めり、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅざい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに 光榮を 獻ず、今も何時も 世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 28 章 8 章 28~9 章 1 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て 聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時 イイス、ゲルゲシンの地に 至りし時、魔鬼に憑らるる者二人 墓より出でて、彼を

迎う、甚猛し、人の敢て其路を過ぐるなきに至れり。視よ、彼等號びて曰えり、神の

子イイスよ、我等と爾と何ぞ與らん、時未だ至らざる先に、爾我等を苦めん爲

に此に來りしか。此より遙に豕の大なる群は牧われたり。魔鬼彼に求めて曰えり、若

し我等を逐い出さば、豕の群に入るを容せ。彼は之に謂えり、往け、魔鬼出でて豕の群に

入りしに、視よ、豕の群悉く山坡より海に逸けて、水に溺れたり。牧う者奔りて邑に入

り、此等の事と魔鬼に憑らるる者の事とを告げたるに、視よ、邑擧りて出でて、イイスを迎

え、彼を見て、其境を離れんことを請えり。彼舟に登り、濟りて己の邑に來れり。

(比較用 口語訳)

イエスはガダラ人の地に着かれると、悪霊につかれたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどであった。すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。さて、そこからはるか離れた所に、おびただしい豚の群れが飼ってあった。悪霊どもはイエスに願って言った、「もしわたしどもを追い出されるのなら、あの豚の群れの中につかわして下さい」。そこで、イエスが「行け」と言われると、彼らは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れ全体が、がけから海へなだれを打って駆け下り、水の中で死んでしまった。飼う者たちは逃げて町に行き、悪霊につかれた者たちのことなど、いっさいを知らせた。すると、町中の者がイエスに会いに出てきた。そして、イエスに会うと、この地方から去って

